

## 被服が対人認知に及ぼす影響

石原久代・鈴木妃美子\*

### Effect of Clothing on Personal Perception

Hisayo ISHIHARA and Himiko SUZUKI

#### 緒 言

被服は本来人体の保護を目的として作られたものであるが、その目的も社会性が高まるとともに審美的な要素が強くなり、自己表現の媒体として重要視される傾向が非常に高くなってきている。<sup>1)2)</sup>また、我々は初対面の人物に対して、その人物に関する予備知識が全くなく、更に一度も会話したことがない場合、その人物を知る手掛かりとして顔面の印象<sup>3)4)</sup>や体型または着用している被服等により対人認知を行っているといえる。対人認知に被服が関与することは、これまでの研究からも明らかにされているが、顔面の印象と着装イメージがどのような関係にあるかについては解明されていないのが現状である。

そこで本研究においては、顔面の印象において性格が異なると判定された人物らにイメージの異なる種々の被服を着装させ、自己表現の媒体として被服が対人認知にどの程度関与するかについて検討した。

#### 方 法

##### 1. 着装者の選出

97枚の若い女性(19~20歳)の約1/5大に引き伸ばしたカラーの顔面写真を用いて、これらの女性と面識のない15名の本学学生(21~22歳)により、すでに報告した研究<sup>5)</sup>をもとに着装者の印象を判定するために適当と考えられる、やさしい-きつい、積極的な-消極的な、陽気な-陰気な、男性的な-女性的な、上品な-下品な、大人っぽい-子供っぽい、奇抜な-平凡な、派手な-地味な、おとなしい-荒々しい、好感がもてる-好感がもてないの10形容詞対を用いてSD法による5段階評定の官能検査を行った。

検査は被験者1名ずつにて行い、まず顔面写真を1枚提示し、先にあげた10形容詞対について評価させ、次いで2枚目の顔面写真を提示して評価させるというように、1試料につき10形容詞対を同時に評価させた。また、途中2回の休憩(5分程度)を入れて検査を行ったが、席を立つことはなく眼を休める程度であった。検査にあたり5段階の各段階には、程度量副詞は提示せず、数値のみを付与して評価させ、更に、提示順位は順序効果がおきないように全被験者について順位を変えて検査した。なお検査実施期間は1991年1月~2月であった。

\*名古屋女子文化短期大学

その結果を重心法によるクラスター分析にかけ、顔面の印象についてのグループ化を行い、その結果をもとに各形容詞対における官能量が各々のクラスター内平均に近く、かつ体型差の少ない6名を着装者として選出した。

## 2. 試料

実験に用いた被服は、先に選出された6名の着装者が日常通学用として着装している服種18点の中から、形態に偏りがないように図1に示したような9種を選出した。服種aは、紺色(8.5PB2.9/1.8)の膝下丈のワンピース、bは黒の膝丈のワンピース、cは白のスーツ、dは白のカーディガンに黒のミニスカート、eは白のセーターに茶色(6.5YR4.1/3.9)のロングスカートを組合せたものである。fは赤(1.6R5.2/11.1)と緑(3.5BG6.7/7.4)のTシャツに黒のキュロットスカート、gは緑(6.1BG6.7/3.6)のトレーナーに白のキュロットスカートを組合せ、hは赤(8.3R4.8/9.7)のブラウスに紺(8.9PB3.2/2.2)のパンツ、iは赤(0.1R4.9/8.4)のシャツにGパン(4.2RP4.5/4.7)を組み合わせたものである。

これらのa～iの9種の被服を先に選出した6名の着装者に着装させ、グレーの背景にて立たせ、その全身をカラースライドに撮り、着装イメージ測定を試料とした。

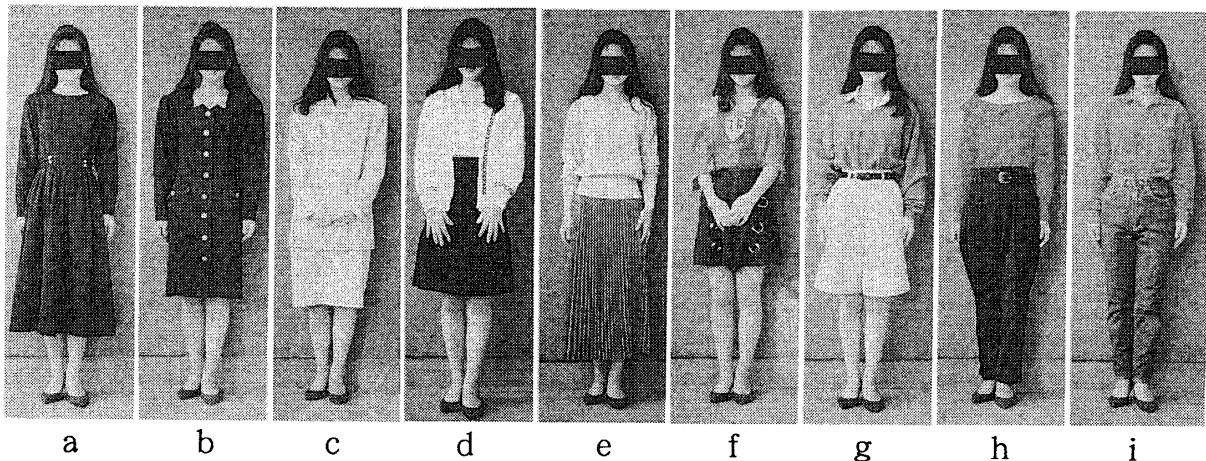


図1 実験に用いた服種

## 3. 着装イメージ測定方法

作成された54種のカラースライドをプロジェクターによりほぼ等身大に投影し、着装者と面識のない本学学生46名(18～19歳)を検査者として、先の顔面のみの判定と同様の形容詞対を用い、SD法による5段階評定の官能検査を行った。検査は46名の検査者を3グループに分けて行い、スライドの提示順位は54種すべてをランダムに並べ、順序効果を防ぐために、グループごとに順序を変えて行った。また1試料の提示時間は約1分である。

得られた結果を先の顔面の印象の検査と同様に数値化し、着装する被服により対人認知がどのように異なるかについて検討を行った。

## 結果および考察

### 1. 顔面の印象

着装者を選出するために、顔面のみの印象をデータとして重心法によりクラスター分析を行った結果を図2に示した。類似度65%でA～Fの6クラスターに分類され、出現者数はAクラスターが21名、Bクラスターが5名、Cクラスターが1名、Dクラスターが17名、Eクラス

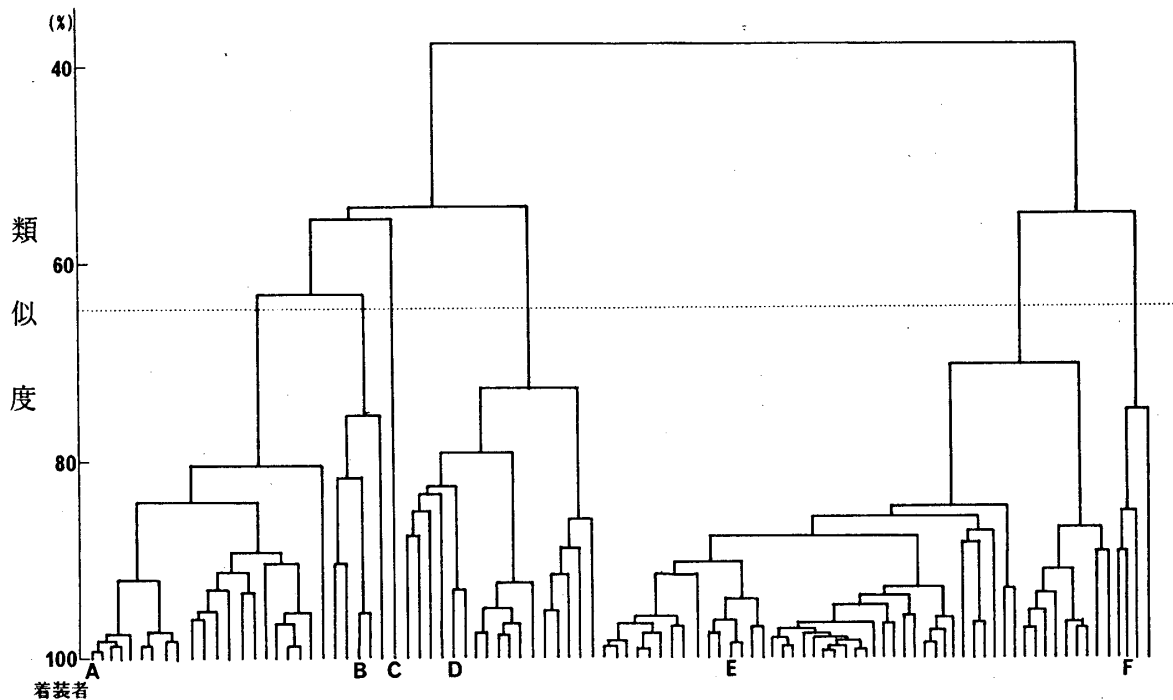


図2 顔面の印象におけるクラスター分析結果

ターは49名と最も多く出現し、全体の50%を占め、Fクラスターは4名であった。

これらクラスターの特徴を知るために、各クラスターに出現した人物の顔面の印象の平均値を表1に示した。下線で示した各形容詞対における官能量の最小値および最大値に着目し、各クラスターの特徴として取り上げてみると、Aクラスターは、きつい、積極的な、陽気な、大人っぽい、奇抜な、派手な、荒々しい等の印象を示すクラスターであり、Bクラスターは男性的な、下品なといった印象が得られている。Cクラスターは、いずれもの印象においても中間な値を示し、Dクラスターは女性的な、上品な、好感がもてるという特徴をもっている。またEクラスターは、やさしい、消極的な、陰気な、子供っぽい、平凡な、地味な、おとなしい、Fクラスターは、好感がもたれないクラスターであるといえる。これらA～Fの各クラスターから官能量がクラスター内平均に近い値を示した人物の中で体型的に類似した6名の人物を選出し、着用実験の着装者とした。

## 2. 着装イメージ

選出された6名の着装者に先の図1に示した9種の被服を身につけさせ、官能検査によりイメージを測定した結果を人物別にまとめ、図3に示した。すべての着装者において、服種によるイメージのバラツキは大きく、実線で示した顔面のみの印象との関係に着目すると、着装者Aにおいては顔面の印象では、きつい、積極的な、陽気な、大人っぽい、奇抜な、派手な、荒々しいと評価されているが、被服を着装することにより、それらのイメージは大きく変化し、陽気な—陰気な、上品な—下品な、好感がもてる—好感がもてないの3形容詞対以外の7形容詞対については、服種の違いによるイメージ変化の範囲内にも先の官能検査による顔面のみの印象が入らないという結果であった。また、顔面の印象において最も男性的な、下品なと評価された着装者Bや最も上品な、好感がもてると評価された着装者D、消極的な、陰気な、平凡な、地味な、おとなしいと評価された着装者Eにおいても、顔面の印象で高い官能量を示した評価が、被服を着装することによって官能量が中間の方へ移行し、それらの特徴が緩和され

表1 クラスター内平均官能量 (顔面の印象)

形容詞対	クラスター					
	A	B	C	D	E	F
やさしい—きつい	<u>2.23</u>	2.36	2.70	2.93	<u>3.43</u>	2.98
積極的な—消極的な	<u>3.75</u>	2.94	2.90	3.39	<u>2.44</u>	3.43
陽気な—陰気な	<u>3.60</u>	2.76	3.10	3.36	<u>2.64</u>	3.45
男性的な—女性的な	3.16	<u>3.42</u>	2.70	<u>2.51</u>	2.79	3.38
上品な—下品な	3.00	<u>2.70</u>	3.00	<u>3.53</u>	3.03	2.75
大人っぽい—子供っぽい	<u>3.71</u>	3.10	2.80	3.33	<u>2.54</u>	2.70
奇抜な—平凡な	<u>3.68</u>	3.04	2.70	2.86	<u>2.11</u>	2.60
派手な—地味な	<u>3.73</u>	2.94	3.00	2.91	<u>2.10</u>	2.60
おとなしい—荒々しい	<u>2.30</u>	2.72	2.90	3.01	<u>3.68</u>	2.83
好感がもてる—好感がもてない	2.74	2.84	2.80	<u>3.34</u>	2.94	<u>2.70</u>

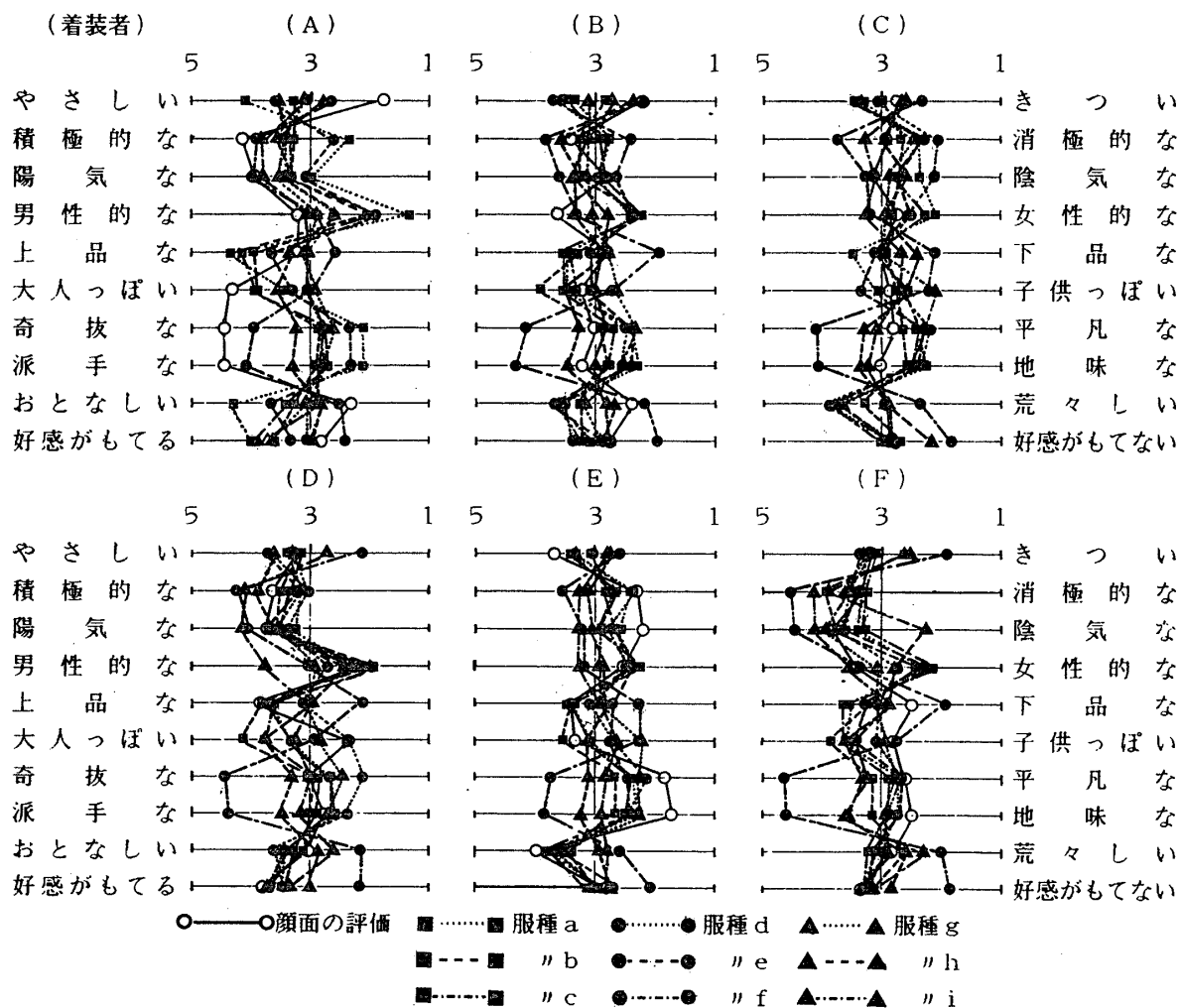


図3 各人物の着装イメージ

るという結果になった。

更に、顔面のみの印象で、好感がもてないと評価されたA, B, C, Eの人物においても、服種cを着装した場合は好感がもてると判断され、逆に顔面のみの印象で好感がもてると判断されたDの人物においても服種fを着装することによって、好感がもてないと評価されていることにより、着装する被服への配慮は非常に重要であると思われる。また、形容詞対を中心にみると、積極的な—消極的な、陽気な—陰気なにおいて、わずかに人物によって9種の衣服の間の官能量の順位性がくずれていることから、個人差があるといえるが、その他の形容詞対については、いずれの着装者もかなり各被服の順位性は類似しており、被服が大きく関与した評価がされている。

これらの被服を着装することにより、6名の着装者のイメージがどの程度近づくかを検討するために、各服種ごとに着装者間の相関係数を求め、表2に示した。まず、顔面のみの印象における相関係数をみると、最も高い相関を示した人物AとBでさえ0.552であり、AとEについては-0.779と負の高い相関を示し、6名の着装者はいずれもかなり異なるイメージをもった人物であるといえる。また、各着装者間の相関の全係数を平均してみても顔面のみの場合は-0.085とかなり低いことが判るが、被服を着装することにより、最も相関の低い服種iでも着

表2 服種別の着装者間相関

服種	着装者	着 装 者					服種	着装者	着 装 者					
		A	B	C	D	E			A	B	C	D	E	
顔面	A						e	A						
	B	0.552						B	0.881					
	C	0.038	0.257					C	0.842	0.952				
	D	0.160	-0.442	-0.276				D	0.802	0.472	0.371			
	E	-0.779	-0.529	0.031	-0.129			E	0.546	0.823	0.785	0.060		
	F	-0.033	0.128	-0.174	0.087	-0.170		F	0.651	0.331	0.251	0.913	0.053	
服種a	A						f	A						
	B	0.903						B	0.908					
	C	0.806	0.880					C	0.833	0.958				
	D	0.891	0.823	0.581				D	0.979	0.966	0.894			
	E	0.818	0.898	0.980	0.570			E	0.802	0.944	0.993	0.862		
	F	0.638	0.627	0.288	0.907	0.265		F	0.974	0.964	0.897	0.990	0.875	
服種b	A						g	A						
	B	0.885						B	0.478					
	C	-0.174	0.067					C	0.117	0.729				
	D	0.978	0.905	0.320				D	0.941	0.544	0.349			
	E	0.700	0.717	0.541	0.592			E	0.278	0.821	0.961	0.482		
	F	0.619	0.734	-0.581	0.741	0.121		F	0.821	0.379	0.166	0.658	0.036	
服種c	A						h	A						
	B	0.866						B	0.853					
	C	0.209	0.625					C	0.181	0.160				
	D	0.934	0.791	0.116				D	0.909	0.671	0.312			
	E	0.586	0.878	0.886	0.476			E	0.651	0.852	0.538	0.412		
	F	0.930	0.816	0.126	0.990	0.488		F	0.583	0.700	0.175	0.383	0.510	
服種d	A						i	A						
	B	0.531						B	0.408					
	C	0.162	0.493					C	0.201	0.745				
	D	0.489	0.576	0.469				D	0.855	0.765	0.511			
	E	0.119	0.762	0.913	0.688			E	0.254	0.900	0.837	0.562		
	F	0.826	0.206	0.507	0.419	0.207		F	0.027	0.376	0.213	0.314	0.084	

装者間の相関の平均は0.470と顔面のみイメージに比べ、かなり高くなっている。また、被服そのもののイメージの明確な服種 f については着装者 C と E、着装者 D と F においては0.990以上の相関を示しており、着装者全体の平均も0.923、更に最も低い着装者 A と E においても0.802と高い相関が得られ、どの着装者も同じように評価されているといえる。次に着装者間の相関の高い服種としては a、c があげられ、これらも服種そのもののイメージの強いものであるといえる。

次に、各着装者における顔面の印象と被服着装時のイメージとの相関係数を表3に示した。仮に、着装イメージに顔面の印象が大きく影響するならば、どの服種を着装しても同じような評価が得られ、高い相関を示すはずであるが、着装者 A においては、服種 f と h が、B においては、服種 i が、C においては h が、D においては e が高い相関を示し、着装者 E においては a ~ e の服種が、着装者 F では d および g が高い値を示しているのみである。これら高い相関を示したものは、各着装者の顔面のイメージとこれらの高い値を示した服種そのものの持つイメージがたまたま一致したものであり、その他の服種についての相関は低く、被服着装時の評価には顔面の印象はそれほど影響しないという結果であった。

表3 顔面の印象と着装イメージとの相関係数

着装者 服種	A	B	C	D	E	F
a	-0.462	-0.598	0.167	0.584	0.959**	0.069
b	0.210	-0.227	0.442	0.565	0.772**	0.194
c	0.045	-0.679*	0.236	0.572	0.917**	-0.194
d	0.130	-0.771**	0.280	0.398	0.939**	0.626*
e	-0.468	-0.713*	0.061	0.705*	0.803**	0.296
f	0.807**	0.602	0.473	0.110	-0.749*	0.260
g	-0.173	-0.168	0.232	0.537	0.717*	0.760*
h	0.826**	0.601	0.736*	0.610	-0.516	-0.306
i	0.356	0.715*	0.391	0.321	-0.443	0.093

有意水準 \* 5% \*\* 1%

以上より、対人認知においては着装者の顔面の印象よりも着装する被服のイメージの方が大きく関与することが明らかになった。従って、初対面時の印象が重要視されるような機会には顔面の印象だけでなく、より好感がもたれるような被服を着装することが望まれる。更に、場合によっては、より見られたいイメージに近づくことも可能であると考えられ、被服の着装にあたっては十分な配慮が必要であると考えられる。

## 要 約

近年自己表現の媒体として扱われる被服が、対人認知にどの程度関与するかについて検討するために、顔面の印象において性格が異なると判定された6名の人物にイメージの異なる9種の被服を着させ、SD法による官能検査を行い、顔面の印象と被服着装時のイメージの違いについて比較検討を行った。

その結果97名の若い女性の顔面のみの印象についてクラスター分析を行った結果、類似度65%で6クラスターに分類され、今回対象とした人物の半数は、やさしい、平凡な、地味な、おとなしいと評価されたクラスターに属した。更に、その結果をもとに選出した6名の人物に形態の異なる9種類の被服を着装させ、それらのイメージを測定した結果、着装者の顔面のみの性格判定と被服着装時のイメージとの間には高い相関は得られず、同一の被服を着装した場合各着装者のイメージはかなり近いものとなった。特に、着装した被服が大きな特徴をもち、被服そのもののイメージが明確な服種程、各人物間のイメージの相関が高くなる、すなわちどのような人物が着装しても同じようなイメージを与えるという結果が得られた。

従って、初対面時の印象が重要な機会にはより見られたいイメージをもつ被服を選択する等、着装する被服に十分な配慮が必要であると考ええる。

## 文 献

- 1) 神山進, 牛田聡子, 枅田庸; 織消誌, **28**, 335~343 (1987)
- 2) 神山進, 牛田聡子, 枅田庸; 織消誌, **28**, 378~389 (1987)
- 3) 大橋正夫他; 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科 — **19**, 13 (1972)
- 4) 大橋正夫他; 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科 — **20**, 93 (1973)
- 5) 石原久代; 名古屋女子大学紀要, **37**, 11~20 (1991)
- 6) 石原久代; 家庭科教育, **68**・10, 68~72 (1994)
- 7) 岩下豊彦; S D法によるイメージの測定, 川島書店 (1983)